



市民安全部 防災対策課

副主査 橋村 和雄

【派遣先】

石巻市 建設部 基盤整備課
建築課建築指導室

発災からほぼ2ヶ月後、派遣初日の石巻市内



歩道のがれき（2週間後にはなくなる）

石巻市役所に到着した当日、市役所で地図や写真で被災の状況を教えていただいた後、引継ぎの時間まで市中心部を歩きました。

市役所のすぐ近くでも、信号機が未だに動かず警察官が手旗信号で対応し、歩道には津波や浸水の被害を受けた家財道具が山積みになっていました。また、津波で大きな被害を受けた地区では、道路のがれきこそ片付いているものの、道路以外は未だに2ヶ月前の状態のようでした。

復興に向けたまちづくりの市民アンケート



スーパー入口でのアンケートの様子



女川町の被災状況

最初の業務は、基盤整備課での被災した世帯を対象とした復興に向けたまちづくりのためのアンケート調査でした。神奈川県からの派遣職員1人に対し、震災で職を失った市で臨時職員として働く3人が付き、車で人が多く集まる場所に移動し、震災前の居住地・被害の程度・今後の居住地の意向・市に望むもの・自由意見などを個別に聞いていくものです。また、移動の合間には、臨時職員の案内で東松島市や女川町も回りました。このアンケートの自由意見を伺う中で「津波で家族も家もなくし、何度も死のうと思った。でも、全国からいろんな人たちが自分たちのために来てくれているのに、生き残った自分が死ぬわけにはいかない。みなさんに毎日励まされている、ありがとう」と泣きながら答えていただきました。これを聞いた自分も聞きながら泣いていました。今思い出しても涙が出てきます。

被災した住宅の応急修理を受付



窓口業務の様子



整理券の順番で申請カウンターへ

アンケート調査期間終了後は、建築課建築審査室にて、災害救助法に基づく住宅の応急修理制度の申請受付を担当しました。毎朝、200枚の整理券を7時30分頃から配布し、9時過ぎにはなくなってしまう状況でした。よって、窓口業務も昼休みを除き、朝から夕方までひたすらに制度の概要と申請の受付、受付後の流れについて説明をひたすらに繰り返していくという毎日でトイレに行く時間もないほどでした。しかし、「早く自宅でお風呂に入れるようにしたい」などそれぞれの申請者の思いに応じてあげたいという気持ちで業務にあたっていました。また、忙しい中でも、窓口での「～だっちゃ」という申請者の言葉がとても印象に残っています。

被災した住宅の応急修理を受付



階段の踊場は案内の貼紙でいっぱい



手続きの流れもあちこちに

直接担当した業務以外にも庁舎内では、り災証明の発行、義援金の給付、がれきの撤去など様々な応急対策が進められ、それぞれの整理券が配布され、受付窓口が設置されていました。また、庁舎内には説明の貼り紙があちこちに貼られていました。これらの応急対策に共通するのは、北海道から九州まで日本全国から派遣されてきた自治体職員が、受付業務を担っているということ。実際、毎朝の市役所に向かう途中のコンビニでも全国の都道府県や市町村名の入ったベストを着た職員であふれていました。しかし、ほとんどは短期の派遣であるため、石巻市職員の負担を減らすためには、派遣職員間での業務の引継ぎをいかにうまく行うかが課題であると感じました。

派遣を振り返って

現地の情報もあまりない中、被災地で自分に何ができるのか不安に思って石巻に向かいました。しかし、他の派遣職員とともに、基盤整備課では石巻市の予測を大幅に上回るアンケートを回収し、また、建築指導室ではそれまで石巻市職員が行っていた窓口業務を担うことで、職員が順番に休めるようになるなど役に立てたのではと思っています。しかし、すべてがスムーズにいったわけではありませんでした。災害応急対策をより迅速かつ効果的に進めるためには、他自治体からの派遣職員にどこの課で何を担ってもらうのか、また非常勤職員の活用について事前に準備しておくことの重要性を強く感じました。



財務部 契約検査課

主事 坂本 真澄

【派遣先】

石巻市 建設部 建築課建築指導室

私にできること



石巻駅前

地震発生の3月11日以降、被災地から遠く離れた茅ヶ崎に住んでいる私にできたことは、様々な場所で行われている募金に協力することと、節電を意識し、日々生活することだけでした。そんな当たり前のことしかできないことにはがゆさを覚えていた頃、ちょうど県からの派遣の話があり、真っ先に手を挙げました。何ができるかは分からないけれど、現地に行って何かしたい、そんな気持ちでいました。

被災者からの温かいお言葉

住宅の応急修理制度申込窓口でのこと。窓口に来られる被災者の多くが自宅が全壊もしくは大規模半壊となった方達です。住むところを失い、家族を失い、それでも将来のために前を向いて進もうと、深い悲しみを抱えて窓口手続きにいられていました。他県から派遣されていることに気がつく、ほとんどの方が「遠いところからありがとう。」と言ってくれました。被災者の強さを感じた言葉でした。



応急修理制度申込窓口



南三陸町の防災対策庁舎



一緒に石巻へ行ったメンバーと



日和山公園からの景色

私が見たもの

半日お休みをいただき、県の職員と石巻市内、女川町、南三陸町の視察を行いました。宿泊先と市役所の往復の毎日では知ることのできない現実がそこにはありました。震災からちょうど3ヶ月目の6月11日14時46分、私は全校生徒の7割が亡くなった大川小学校にいました。献花台には、いまだ発見されない我が子に宛てた母親からの手紙が置いてありました。「見つけてあげられなくてごめんね。」と。この日、地震と津波が残した爪痕をこの目に焼き付けてきました。



道路に船が・・・



全校生徒の7割が亡くなった大川小学校



変わり果てた南三陸町の様子



大火災のあった門脇小学校



建物が津波の勢いで横に倒れている



公民館の屋上に流れついたバス



避難所となっていた湊小学校

派遣を振り返って

震災からすでに3ヶ月が経過していましたが、応急修理制度の申込窓口は毎日人であふれかえっていました。ほとんどの方が自宅の2階でなんとか生活をしているような状態でした。家族を亡くされた方、家を失った方に対して自分自身どう対応していけばいいのか最初は戸惑うことばかりでした。涙を流される方もたくさんいました。そういった方に対して、最後に「頑張ってくださいね。」と手を握って言うことしかできませんでした。それでも笑顔で「わざわざ遠くからきてくれてありがとう。」と感謝の言葉を言ってくださる方がたくさんいて、逆に私が勇気づけられました。地震直後の2日間、避難所運営がうまく機能しなかった等の理由から、行政側と市民との間に溝ができていると感じました。こういったことがこの先起きないことを願いますが、万が一同様のことが起きた時のために、私達行政側は素早く対応できるよう備えておく必要があると強く感じました。8日間という短い期間ではありましたが、多くのものを見て多くのことを考えさせられました。石巻市の死者は3,000人を超え、大勢の方が未だに行方不明となっています。この方達のために生きていることに感謝して、毎日を精一杯過ごしていかなければならないと思いました。



保健福祉部 保険年金課
主事 遠藤 勇

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

住宅の応急修理制度の受付



石巻市内、海側の様子



資料の確認や整理



住宅の応急修理制度申請の受付

石巻市役所で行政支援を行った内容は住宅の応急修理制度の受付・書類の整理です。被災した市民の方に応急修理制度について説明をしていると、中には制度の対象とならず不満がある方もいました。「対象とならないとはどういうことだ！お前おれの家見てみるよ！そしてお前の家見せてみるよ！」と納得してもらえずに怒鳴られることもありました。制度外のことはできません。ですが大規模半壊した様々な家の現状を見た後、あなたの気持ちはわかりますと簡単に言うこともできません。ただ、ただ謝ることしかできませんでしたが、「あなたに言ってもしかたないことですよね。わざわざ遠いところから来てくれてありがとう」と最後には理解していただいたとき、辛い状況にもかかわらずありがとうと言ってもらえたことに胸の底が熱くなりました。また、逆の立場であったときに自分は現実を受け止め納得ができるか、他の人に感謝できるのかと複雑に思ってしまったことを覚えています。受付時以外でもすれ違った際などに神奈川県の子供服を着ていると市民の方は軽く会釈をしてくれたり挨拶をしてくれたりしたことが嬉しく感じ、微力でも少しは力になれたのかなと思いました。



石巻市内、被害の大きかった住宅

被災地にて聞いたこと、私たちにできること

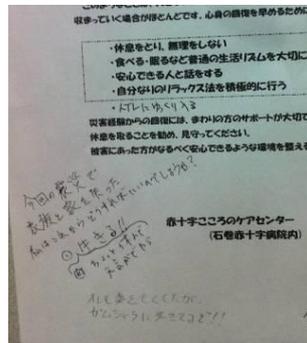
職員は震災当時、食糧が不足し1日に食パン1切れしか食べられなかったことや、大混乱の中、休む暇さえなく市役所に寝泊まりして働いていたことを話してくれました。

ボランティアに来た人からはゴールデンウィークや土日を利用して、遠路はるばる来てがれきの取り外しや住宅をロープで引っ張り解体しているという話をしてくれました。飲食店の店長からは「震災が起きた翌朝に営業所に来てみると1階が浸水して使い物にならなかった。ようやく営業できる程度に修理できた。知り合いに行方不明もいて二度とこんな体験はしたくないよ」と話してくれました。

石巻市内には「復興に協力してくれてありがとう」という貼り紙がたくさんありました。絶対的に人出が足りない中で全国から復興に手助けしてくれることは本当にありがたいことだと話してくれました。「義援金や応援物資、ボランティアや行政支援などの助けがなかったら復興はほど遠いものとなっているよ」と話してくれたことに感激したことを覚えています。復興に協力したいという気持ちは伝わっていると感じました。



市内には感謝の気持ちの貼り紙



トイレの貼り紙には被災者の声が



B級グルメの石巻焼きそば



駅が被害を受け電車が走れないため、道路は大渋滞。



復興に向けてたくさんの人が協力しています

派遣を振り返って

2週間の業務を通じて被災地の人たちにありがとう、手伝ってくれてありがとう、来てくれてありがとうと言われたことが何よりも嬉しかったです。義援金でもボランティアでも東北への旅行でお金を使うなど、何かほんの少しでも、何かしたいというその気持ちは必ず伝わっていると思います。「何か少しでもできることがあるならば」・・・全国ひとりひとりの復興にかける思いや行動が少しでも力になれると信じています。そしてこのような大混乱が起きたときはお互いに支えあっていくことが非常に大事だと思います。日頃から地域のコミュニケーションを密にとりあい様々な方々とお互いに助け合える環境作りが必要であると感じました。



環境部 環境事業センター
主任 森岡 崇生

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

被災地の第一印象



石巻市最大のイベント「川開き」の様子



JR 石巻駅前



地震直後火事にあった門脇小学校



民家の庭先に漁船が…



津波で押し流された墓石



海岸近くははまだ手つかずの状態

石巻市役所付近は、駅前ということもあり店舗などの復興が始まっていました。しかし、海岸地区に行くと津波による被害のため復興の兆しも見えない状態でした。焼け焦げた小学校、民家の庭先に乗り上げた漁船、津波で押し流された墓石の山など市内各所に震災の爪痕が数多く残っていました。そして未だ地震が群発し、滞在中には震度5程度の地震が3回も発生しました。

どんな支援を？

災害救助法に基づく住宅の応急修理制度の事務支援を行いました。応急修理制度とは、被災した住宅の修理を自らの資力で行うことができない被災者を対象に、被災証明による半壊以上の申請に基づき市が52万円を上限とし、対象住宅の修理を行う制度です。



建築指導課窓口の様子



神奈川チームの詰所の様子



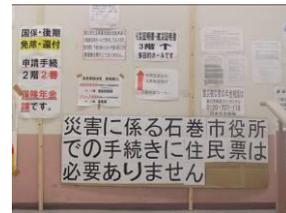
神奈川チームと建築指導課職員

市として考えるべき課題

今回のような大災害の場合、災害救助法による住宅の応急修理制度、被災者生活再建支援法による被災者生活再建支援制度、市条例に基づく災害弔慰金の支給及び義援金の分配など、多岐にわたる支援を被災者は受けることができます。しかし、法律の違いから所管事務がそれぞれの課にわたることになり、被災者としてはあちこち手続きにまわらなければならないこととなります。茅ヶ崎市の行政規模を考えると、通常業務に加え、震災対応業務を行うことは難しいのではないのでしょうか。石巻市の例を教訓に、被災者に対する行政支援を総合的に受付対応し処理できる体制を考えなければならないのではと感じております。



デパートを改装した石巻市役所



庁内は案内の貼り紙でいっぱい



手続きは1カ所では終わらない

派遣を振り返って

行政事務支援を務めさせていただき、大義名分や行政の思惑だけで現場は務まらない被災地自治体職員の支援業務の難しさを痛感しました。しかし、それが現実ではないかとも感じました。感謝やお礼や見返りを期待せず、嫌な思いをしようが、得るものが何もなかろうが、被災地の為にできることをやる。そのような気持ちで務めなければ、日を迫る毎に人心が荒ぶ、極限状態の被災地における支援業務は遂行できないのではと感じました。一方では、ひたむきな姿によって人間関係を作り、被災者を勇気づけ、希望を与え、支援業務の中で精一杯の成果を挙げ、被災者の信頼を得ている多くの職員がいることも紛れもない事実であります。「心が残る」「やり残したことがたくさんある」「また来たい」こうした思いを残し石巻市を後にしました。



経済部 雇用労働課

副主査 大八木 元

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

震災5ヶ月後の窓口



建築指導課前の臨時窓口



り災・被災証明書申請等の臨時窓口

派遣された建築指導課での業務は、以前派遣されていた職員と同様に住宅の応急修理制度に関するものでした。内容としては、それまでの申請受付業務（窓口）ではなく内部処理が中心となりました。実際に窓口では新規の申請が減り、比較的落ち着きつつある状況で、震災から5ヶ月という時間の経過を感じました。同時期でも、り災、被災証明書や応急仮設住宅の申請等の他の窓口では、混乱している状況が続いているところもありました。派遣された職員に負担のかかる面はありますが、業務の進捗具合によって派遣された職員が本当に必要とされている窓口配置されるなど流動的かつ柔軟に対応していく必要性を感じました。

支援の輪



県・市町村合同隊第20～21陣



各県の事務スペース

建築指導課では、神奈川県から派遣された職員他に関西広域連合より兵庫県芦屋市・姫路市と宮城県からも職員が派遣されていました。阪神淡路大震災を経験した関西からの応援は非常に心強く、宮城県職員も自らが被災しているにも関わらず県としての役割を果たそうという姿勢を感じました。また、建築指導課以外にも北海道から九州まで多くの職員が派遣されており、支援の広がりを感じました。派遣された本来の目的ではありませんでしたが、派遣された職員同士でコミュニケーションを取ることができたことはとても貴重な経験となりました。

経済部職員として

派遣期間中には産業部商工観光課の職員から、融資制度の状況、管内の雇用情勢、ハローワーク臨時窓口の開設、緊急雇用創出事業を活用した100人規模の雇用支援、中心産業である水産加工業の復興が急務であること等いろいろな話を伺うことができました。震災後に仙台等に拠点を移した事業所もあり、その後、石巻市に戻ってくるかは分からないとの話も伺い、産業の復興の重要性を強く感じ、支援策を予め検討しておく必要性を強く感じました。



水産加工会社の巨大缶詰



ハローワークのお知らせ



石巻漁港付近



陸前高田市役所



気仙沼市 JR鹿折唐桑駅付近



南三陸町防災対策庁舎



ホット横丁石巻

派遣を振り返って

漠然と何か自分にできることはないかと思い、市職員労働組合と市社会福祉協議会のボランティアツアーに参加しました。ボランティアの重要性を強く感じるとともに行政職員として支援をしたいという気持ちが出たため、行政事務支援の派遣を希望しました。

派遣期間中には、石巻市内や女川町を視察させてもらい、唯一の休日には、レンタカーを借りて陸前高田市、気仙沼市、南三陸町へ行ってきました。あまりにも広い範囲での被害の大きさを実感し、衝撃を受けました。実際に自分の目で見て、耳で聴くことができたことは、大きな経験であると思います。まだ実際に被災地へ行っていない人にこの経験を伝えることが派遣された職員としての役割のひとつであると感じています。そのうえで被災したときに行政としてしなければならない想定できることについては、現実に即して検討し、準備しておく必要があると感じました。

また、勤務後の時間には大手飲食チェーン等の会社が集結した「ホット横丁石巻」などへ行く時間も取ることができました。復興には、ボランティアや行政事務の支援も必要ですが、地元により密接した形での支援も求められるのではないかと思います。風評被害もあり、東北産のものは倦厭されがちですが、そういったものをひとつでも購入、消費することなどは小さいながらも我々にできることなのではないかと思います。復興までまだまだ時間がかかりますが、今後も自分にできることを少しでも続けていきたいと思っています。



財務部 市民税課

主任 富樫 美香

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

なぜ、派遣職員に応募したのか

「3月11日、自分が配備職員として全く行動できなかった」というのが大きな動機です。幸いなことに茅ヶ崎は大きな被害はありませんでしたが、自分が行政職員として、こういう事態が起こったときに、どう動けばいいのかがまったくわかりませんでした。災害時に市が混乱しないためにも、応用力や実践力を身に付けたいと思いました。それだけではなく、もちろん被災地で助けが必要であれば、自分にできることを率先してやらなければいけないと心から思いました。石巻市職員から、「あなたたちが来てくれて、やっと連休が取れるよ」と言われた言葉が忘れられません。



行政支援の仲間たち

石巻市役所 建築指導課での仕事

住宅の応急修理制度の申請受付、それに伴う伝票処理を主に任されました。8月15日時点で、申請件数は8,953件。伝票処理は3,793件。支援最終日、受付件数は9,225件。伝票処理は4,295件。2週間での申請受付件数は、272件、伝票処理件数は502件でした。17日正午過ぎに震度4、19日午後には震度5弱の地震があり、震度2、3の余震はたびたび起こっていました。石巻市職員はみな落ち着いており、リーダーである課長は大きな声を出し、課員に情報提供をし、事態に対応していました。



建築指導課の申請受付窓口

視察で実際に目にした被災地の現状

石巻市内、避難所である学校、女川町に視察に行きました。市内でも被害の差は大きく感じられ、がれきが処理され、悪臭も消えてきています。しかし、漁港や沿岸部はまだ戦争の後のようで、ショックを越え絶句する光景を覚えています。女川町の漁港に佇んでいた初老の男性から、25歳の娘さんが見つからないという話を聞きました。死亡者、行方不明者数が、あまり意識されなくなってきたように思う今、その数だけが一人歩きをしているように思えますが、ひとりひとりの悲しみがいまだに残されていることを痛感しました。



日和山公園からの景色



船が陸地まで流されています



がれきの処理はまだ終わらない



門脇小学校

派遣後・・・石巻市役所職員との交流

建築指導課でお世話になった女性職員とは今でもメールをやり取りしています。クリスマスプレゼントをサプライズで贈ったところ、お礼のメールをいただきました。彼女からのメールの言葉です。「毎日忙しく走り回っていると、一日一日過ごすだけで精一杯でなかなか心に余裕が持てないのですが、このような心遣いを受けると本当に励まされます。もう少し頑張れる！って思います。今回の震災で大変な思いをしましたが、多くの人達と出会う機会、こういった気持ちに触れる機会があったのは本当に幸せです。ありがとうございます。」

派遣を振り返って

被災地の現状に身を置き、事務処理もただ数をこなすだけではなく、ひとつの申請書にもひとつの家族の悲しみが含まれているような気がします。住宅は修理すれば直りますが、傷ついた人の心は完全に癒えることはありません。それでも、小さな希望や光を見いだすような生活再建を行政機関はしていかなければなりません。市民が自治体から一人もいなくなってしまうたら、行政機関は不要となります。市民あつての自治体であることを感じました。この現代社会において、ライフラインがすべて寸断される現実を想像し、市民の生活を守る基盤を構築すること。そして、それらを適正に迅速に実践していかなければならないと思います。今回は、他県の支援という立場で派遣されましたが、いつ自分の市に大規模災害が起きるかわかりません。災害が起きるとどのような行政機能の麻痺が起きるのか、何が起きるのか、何が必要なのか。避難所とは、被災者とはどのようなものか。どのような問題が起き、それをどのように解決していくのか。住宅の応急修理制度以外の被災地行政に関しても多くを学んだ2週間でした。これからも被災地の現状を把握し、自らの県や市に還元できることは多々あります。その義務が私たちにはあると考えています。



財務部 収納課
主事 松森 拓郎

【派遣先】

石巻市 建設部 建築課

「応急仮設住宅」入居のあっせん事務

6月25日までに仮設住宅への入居希望（書類）を出されていた方へ、空室のある仮設住宅をあっせんしました。入居しているかないか、希望の間取り、家族構成等はすべてエクセルで管理しました。私が着任したときは、「運動公園」「TBT」「河南・河北」「桃生」というエリアしか空室がなく、交通の便がよいとは言えない仮設住宅のあっせんとなりました。とにかく手当たり次第入居希望者に電話を掛け、空室への入居をあっせんしていきました。なかには、「障害者が普通の仮設に入居し、健常者が障害者用の仮設に入居している」という通報もありました。情報が錯綜するなかで、事務的に業務をこなすことしかできませんでした。



仮設団地の中に貼られていた地図



左図の1ブロックの詳細

電話による問い合わせ対応

6月25日までに申し込めなかった方々からのクレームは毎日続きました。期限を知らなかった、別の場所に身を寄せていた等、理由は様々ですが例外なくすべてお断りすることになりました。長いときで90分を要し、それでも納得はしていただけませんでした。なかには脅迫まがいの発言をされる方もおり、自分が派遣職員であることを話すと会話が途切れ、複雑な気分になったことを覚えています。

石巻市内の被災地視察

日和山からは市内を一望することができました。私の視界に真っ先に入ったのは橋でした。ガイドの方の話によると、津波はあの橋を飲み込んで市内に入ってきたということでした。あらためて津波の威力を痛感しました。いま、自分の目の前にある穏やかな風景を、地元の方はどのような気持ちで眺めているのだろう。日和山から石巻港を目指す途中、門脇町に寄っていただきました。津波が運んできた石油等によって、大規模な火災に見舞われた門脇小学校。真っ黒焦げの校舎に言葉が出ず、たくさんの花が手向けられていた光景に、カメラを向けることができませんでした。門脇地区は特に津波の被害が甚大で、周りを見渡しても、ここの部分だけ風景が切り取られていました。何もできず下を向いていると、アスファルトに「復興するぞ」の文字を見つけました。地元の方々がこれだけ前を向いて頑張っているのに、まだ何もしていない自分に嫌気が差しました。できることは何か、あらためて熟考しようと思いました。



あの橋の上まで津波が来た



住宅街だったのが嘘のよう



復興するぞ

台風15号による二次災害への対応

台風15号の影響で、想定外の問い合わせが殺到しました。「河川の増水で浸水しそう」「雨漏りがひどいがどうすればよいか」など、仮設入居者の方の不安が一気に爆発したように思います。入居後の問い合わせは仮設住宅運営管理室が応じるようになっていたものの、人手が足りず建築課にも問い合わせが殺到しました。雨漏りの修理で現場に出掛けた職員も多く、回答保留にしたままメモ用紙だけがたまっていきました。しかし、こういった状況でも部署間の連携は取れており、翌日までにはほとんどの問い合わせには回答できていました。現地の職員の方の底力を見たような気がします。

派遣を振り返って

被災地で学んだことはたくさんありましたが、特に「平時にこそ、有事の際のプランを練っておくこと」の必要性を痛感しました。石巻市で耳にした市民の声は、「対応が遅い」「先行きが見えず不安だ」「不平等だ」といったものが多数を占めました。派遣されるまでは私も似たようなことを考えていましたが、現地で支援していくなかで、震災後の舵取りの難しさを痛感しました。そこで、災害時のマスタープランをつくり、徹底的に周知させることが大切と考えます。仮設住宅の建設予定地は？入居方法（優先順位）は？申し込みの期限は？等、すべてが計画通りにいくとは思いませんが、あらかじめ周知しておくことで先行きが見え、不平等感も緩和されると思います。何より災害による混乱を多少なりとも抑えられるのではないかと考えています。自治会や市民の方々との意見交換（勉強会）を定期的で開催し、全員でマスタープランを策定できればと考えました。



保健福祉部 保険年金課

主任 伊藤 政宏

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

住宅の応急修理制度

住宅の応急修理制度の事務の中で、業者から見積書を取り寄せた後に石巻市役所から修理業者への依頼書を作成し、送付までの事務処理と修理完了後の業者から届いた請求に対する支払伝票を起票し支払まで進める業務を行いました。

支払伝票の起票は、請求書ごとに起票する単票形式のものと複数請求書を一度に処理するものと大きく2つに分かれており、データ作成は派遣職員が行っていないため、既に作成されているデータを元にしなければ複数請求書の伝票を起票することができなかったため、連絡を頻繁に取り合いながら分業体制を整え、日に100件以上の請求書进行处理できるようになっていたことは成果と言えますが、伝票起票や修理依頼書の発送は派遣職員のメイン業務という位置付けもあり、事前チェックを終えるまでの過程が長く、スピードアップを達成させたとは言えない事が反省点だと感じました。

被災地の現実と希望

石巻市内、避難所、女川町に視察に行き被災地の現実を目で見ることにより、「被災地」という言葉の重みを実感しました。新聞やTVで見ていたにもかかわらず目の前の光景が現実だと頭が受け止めるまで時間を要し、声をかけられていたことに気付かない状態となってしまう同行者を不安にさせてしまいました。撤去作業が行われているがれきが被災する前までは大切な「家」だったのだろうと思うと、直視できませんでした。

ただ、被害の大きかった門脇地区にある日本製紙（株）石巻工場の製造ラインが一部復旧し仕事を再開できた人たちが居る事は素直にうれしく、復興は人から始まるのだと強く感じ光が差したと感じた瞬間でした。



被害の大きかった門脇地区



製造ラインが一部復旧した工場

台風15号

台風15号が派遣期間中に石巻市を直撃し、その勢力は凄まじく復興をゆっくりと進めている石巻市に無情にも大きな被害をもたらしました。

地盤沈下の影響もあり市内は冠水状態となった道路が多く、仮設住宅で生活されている人や修理が完了していない家屋に住んでいる人の不安は大きく、市に問い合わせが殺到しました。建築指導課職員も災害に備えるべく不休で対応をしていました。

夕方から台風対応の職員配備が決定し全員が配備箇所の確認を行ったあと、台風の進路上に住まいのある職員は家族に連絡を取り無事の確認と避難指示を行っている姿を見ました。日々石巻市の復興に忙しく働いている職員も被災者であり、家族も居て自分も不安と戦いながら生活しているのだと感じ、少しでもサポートすることができればと、気象庁のホームページ確認や防災対策課へ連絡を取り情報収集を行い、経過報告を行いました。が勉強不足から市内地図を頭で描くことができず、浸水箇所や交通が遮断された地域の情報をスピーディに連絡することができず、住宅の応急修理制度の業務のことだけを考えると派遣期間を過ごそうと考えていた自分の甘さを痛感しました。

コミュニケーション

短い派遣期間でチームワークの大切さを再認識させられました。派遣期間中はホテルから全員で出勤して帰りも基本的に一緒という共同生活を過ごしたのですが、全員が短い派遣期間中でも何か成果を残すことができないか？と真剣に考えており、自分の考えを遠慮無く全員に伝え改善できそうならすぐに取り入れようと行動していました。チームが一丸となって同じ方向に進めば、1人で行動するよりもより大きな力になると分かっていたつもりですが、派遣期間中は相手の考えを理解すること、自分の考えを正確に伝えること＝コミュニケーションの大切さを改めて勉強させられたと感じました。



支援職員一同

派遣を振り返って 「仕事」という側面で被災地を支援したいという思いがあり現地へ向かいましたが、考えの至らなさを実感しました。自分に課せられた「住宅の応急修理制度」の業務ですが、当然そのほかにも石巻市建築指導課が行うべき業務があり、被災し倒壊した家屋の修理だけでは本当の復興とは言えず、新規施設の建設等インフラ復旧を進めることが復興を加速させることだと実感しました。

建築指導課職員の方がたは、本来業務に早く戻らなきゃ復興が遅れる・・・それが歯がゆいと伝えてくれました。支援業務を正確に行うことも重要ですが派遣期間中は石巻市職員として通常業務のサポートも行える一定レベルの基礎知識が必要だと実感しました。



保健福祉部 保険年金課

主事 鈴木 景裕

【派遣先】

石巻市 建築部 建築指導課

視察1 日和山～石巻市街

地震後の津波で多くの市民が避難した場所です。震災直後は臭いが酷かったそうです。山の上から海の方を見渡すと、ほとんどの住宅は津波の被害に遭っていました。一見被害にあっていないような家もありましたが、海側から見ると家がえぐれたように破壊されて、津波の力の大きさと怖さを感じました。倒壊した住宅などではまだ生活用品などが散らばっている状態でした。



日和山からの光景

視察2 石巻漁港～女川町

私が訪れたときの石巻漁港は思っていたよりもかなり復興していました。石巻市の8割の収入を占める漁港なので早急に復興作業に取り組んだのでしょうか。がれきの量は600トンにもおよび、石巻市に出るゴミの100年分が1日で発生したことになると思います。

女川町役場は津波により使用ができなくなっています。地震発生時、消防署の屋上が避難所として解放されましたが、それ以上の津波がこの町を襲いました。大きな建物は横たわり、それ以外のものは津波に流されて跡形もなくなっています。津波は約20mに達し、高台にある女川町立病院にも被害をもたらしました。この病院には他県から支援に来ている方が多く、復興作業が行われていました。



ミニカーのように何台も積まれていた



巨大な缶詰が横たわっていた



未だに船が陸地に

住宅応急修理制度について

住宅の応急修理の修理費の上限は52万円で、修理できるものは屋根や梁など住宅の基礎となるものがほとんどで、エアコン（家電）や内装は対象外となっています。制度を活用する要件や、修理対象外などの制限が多いため電話での問い合わせもたびたびありました。市民の方からの電話で、私が建築指導課（応急修理制度）の業務に慣れていないことに気付いたのか「あなたはそこの職員の人？」「いつまでいるの？」など聞かれました。ひと通り説明すると最後に「ありがとう、あと少しがんばってください」と言われたことがとても心に残っています。

窓口業務とデータ入力・事務処理

派遣された行政支援職員は5人で、4人が窓口業務、1人がデータ入力など事務処理を担当しました。私はデータ入力担当になり、膨大な量の入力業務を行いました。事務処理は複雑ではないので、何回か作業しているうちに覚えることができます。電話は応急修理制度についての質問や、被災された方の手続きに関連することに回答します。もちろん建築指導課なので、通常業務内の専門的な用語や質問も市民の方から聞かれるので、そのような電話については職員の方に代わってもらうようにしました。



行政支援職員たち

来庁者数は月曜日をもっとも多かったです。窓口では応急修理制度の手続きが多いので最初は職員の方に聞きながら業務をしていましたが、2日目以降は慣れてきたので1人で処理をしていました。1週間という短い期間で業務に慣れた頃には派遣期間が終了してしまいました。行政職員としてだけでなく、被災地の方の力になれるようにこれからも情報収集していきたいと思います。

派遣を振り返って 女川町の消防署の屋上を開放したように、迅速に避難場所を開放することは災害時の市の判断としては当然だと思います。しかし、想定外の津波がきたことで、多くの避難者を命の危険にさらすことは絶対にあってはなりません。私たち職員の判断で多くの人の命を助けることもできるし、命をおとす危険もあります。東日本大震災時には私も含め多くの職員がどのように対処すべきか迷っていました。行政事務支援を経験したことで、私たちがこれからどのように市民や住んでいるまちを守っていくのか考えなければならぬと感じました。



教育総務部 教育施設課
課長補佐 大川 哲裕

【派遣先】

石巻市 建設部 建築指導課

少しずつ復興に向けての動きが



地震直後の駅前の様子



日和山より市内沿岸部の様子

震災から半年以上経過した中で、仙台駅から石巻へ向かうバスから見える景色は以前に訪れた東北の風景と変化は感じられませんでした。石巻駅付近では被災した建物の解体や片付けも進み、街のネオンも駅周辺では戻ってきているようでした。警察官による手信号も到着の前日に終了していましたが、歩道のインターロッキングブロックはまだあちこちで隆起、沈下し歩きにくい状況でした。

建築指導課で住宅の応急修理業務を担当



建築指導課



市役所も被災しています

第27陣は通常時に比べ総勢5人とコンパクトでした。うち3人が建築指導課での支援業務、残りの2人は建築課での支援業務にあたりました。建築指導課では、「災害救助法」に基づく住宅の応急修理業務のうち、修理見積書の受付・審査業務と修理依頼書の作成・起案業務、完了報告書の受理と内容審査が主な役割でした。日曜日でも開庁しており、窓口は日曜日・月曜日が非常に混雑しました。

台風15号による被害も



浸水の残る住宅地

津波で被災した家屋の修理が一向に進まない9月下旬、大型台風が被災地を直撃しました。地震による被害が原因で台風被害を受けた場合は、応急修理の対象とすることとなっていたため、応急修理の相談が急増しました。相談を受けるたびに被災者の悲しみを感じます。工事を依頼したい知り合いの大工さんも津波で道具が流され廃業に追い込まれているという話も聞きました。

被災地の状況は・・・



津波の被害は新しい住宅にも・・・



道路にのりあげた漁船

土曜日の午前中は休暇であったため、レンタサイクルで被災状況を視察してまわりました。海に近づくにつれて状況は一変してしまいます。大きな地震では古い建物が倒壊してしまうことはある程度理解できるのですが、津波は建物の新旧に関係なく被害を及ぼしています。新築の住宅も無惨な姿をさらけだしており、大門町、湊町付近には人の姿もなく、ゴーストタウンと化していました。

派遣を振り返って

かつて阪神淡路大震災や新潟県中越地震への派遣経験から、建築技術職としていかに支援ができるか。これが私の出発前の課題でした。住宅の応急修理に関しては技術的な相談もあり、専門的な知識は時には役だったのではないかと感じています。また、普段神奈川県のカブス（ベスト）を着用していたため、窓口に相談にこられた現地のNPO法人の方から声をかけていただきました。「神奈川から応援お疲れさまです。私も以前結婚前に神奈川に住んでいました。茅ヶ崎です。」この言葉は非常に嬉しかったです。今回の派遣で唯一残念だったことは、派遣期間が短かったことです。しかし、この貴重な経験はいつか必ず役にたつときがくると思います。地震はいつくるのではなく、必ずきます。その日に備え、『復興に向けてのプロセス』も事前に検討する必要性を強く感じました。